

## 追悼文

結城さんの突然の訃報に接し、大変驚いた。いつも元気だった結城さんなのに、突然過ぎる。

結城さんと初めてお会いしたのは、2009年渋谷先生の新学期の授業だった。私が教室に入っていくと、黒っぽいフレームの老眼鏡をかけている年配の方が、一番奥の席に座っていた。私が隣の席に座ろうとした時に、その人生の大先輩であろう人から「はじめまして」と声をかけられた。私のような若者（当時）に、大先輩から声をかけてくださることに感銘を受けた。「謙虚な人だなあ」というのが、私の結城さんに対する第一印象だった。

結城さんは、長年の企業で活躍された経験を持っていらっしゃったが、実は学問研究により興味をお持ちだった。大学卒業時に、大学院への進学も考えていたが、弟さんたちの学費を稼ぐために、進学を断念し就職の道を選んだそうだ。そして、社会の荒波を超えた50年後に夢だった研究の道へと進むため、75歳のご高齢で早稲田大学大学院・法学研究科の門をくぐった。

高林先生の講義のルールとしては、発表者が発表前日の朝までに発表資料を受講者全員に送付し、受講者は事前にその発表資料を読んだうえで授業に参加するというものだ。結城さんは、配布された他の学生の資料を事前に読むだけでなく、関連文献も調べていた。そして、授業で高林先生のご指導の後に、皆からのコメントはと聞かれると、必ず質問したり助言したりしていた。

高林先生は、しばしば、結城さんのことを「神様」と呼ぶ。結城さんは心が優しくて熱心な方だからだと思う。中国では詰め込み教育が採用されているため、中国人留学生の中で、日本の大学の教育制度に慣れない人が多い。また、日本語が外国語であることもあり、学問の研究は余計に難しい。そこに、結城さんは、困った中国人留学生に手を差し伸べて、日本語を教えたり、論文を指導したりしていた。中国人留学生にとっても、結城さんは「神様」であった。そして、それは、講義の前後の指導にとどまらなかった。ご高齢にもかかわらず、論文発表直前にまだ論文を完成していない留学生を家に招待し、一日論文指導をしていたこともあった。ちなみに、私の場合は、論文だけではなく、就職まで大変お世話になった。私にとって、結城さんは「神様」であり、論文指導者であり、かつ、就職担当者でもあった。

就職以来、結城さんには定期的に近況を報告してきた。私が会社で頑張っていることを話すと、結城さんはいつも喜んでくれる。会社で頑張ることが、私の結城さんに対する一つ

の恩返しであると考えて、一生懸命働いてきた。今年は、7月にお会いしてまた報告しようと考えていた矢先に、訃報を受け取った。結城さんにもう報告できないことはとても残念であり、寂しい。

結城さん、どうか、安らかにお休みください。皆を見守らなければならないかもしれませんが、私のこともどうか見守ってください。いろいろとありがとうございました。